

美術随想

私の作品



膠絵とのお付き合ひ

表紙「老寿」に寄せて

桜井 実

油絵は学生の頃、親しい友人の絵の道具一式を借りて実験をしたのが始まりであった。学内の秋の展覧会の常連にもなった。式場隆三郎の本を読みながら、モンマルトルの作家の真似を繰り返していたこともあった。しかし卒業してからは自分の専門の修行と研究でしばらくの年限、チューブに入った油の絵の具も固まったままになっていた。

それから東北大学の教室に戻ってみる

と、元絵画部で一緒だった後輩などに顔を合わせることもあって、秋の大学祭に絵を出品するように頼まれ、再び絵の仲間入りをすることとなった。ところが、教室での研究生活の忙しさに追われて、いつ作品を作ったらよいか至難の問題をこなさなければならぬ。夏休みの午後、車を飛ばして山や森を描きにカンバスをもって出かけたこともあった。それでも油絵は仕上げるまでには日数がかかる。

展覧会の日日も迫ってくる、気が気でないどころか、夜遅くなってから、ヘア 드라이ヤーで何とか乾かさないと持ち運びも出来ない。うっかり油に火が移って焦がしてしまった思いもある。

そこで、もし日本画なら、水で絵の具を溶かして描くのだから、その日のうちに乾いて仕舞つことに気がついた。勿論身边には、油絵の時と同じように相談したり面倒を見てくれる人などは全くない。それでも思い立ったが吉日で、正月休みに日本画の道具一式を買い揃えて描

いてみることにした。今でも覚えているが6号Fのボードに自分好みの林の風景画をなんとその日のうちに完成できることを体験した。「これからは日本画だ」とほくそ笑んだものだ。

その頃はもう50歳を越していたが、それからといつものは何となく忙しくて直ぐ片づけられるという観念に囚われて身近にある花瓶の花でも色紙や葉書絵に描いてしまつ癖が付いてしまったようである。学内の開学100年祭の美術展の企画やら整形外科学会総会の際の初めての美術展などを併設して楽しむことになった。勿論、自らも多少は見劣りしない30号ほどの作品も出品して、お付き合ひするよつにまでなっていた。

そつこつするうちに、大学も定年退職を迎えることとなって、山形市の病院勤務となったが、この山形地方が素晴らしい自然に恵まれて画材がいくらでもあふいつの間にか作品もたまつて、ここを退職する時には引越し荷物としていささか

邪魔にもなるので、いわゆる個展を開いて知り合いの人たちに持って行ってもらうこととした。面白半分挑戦してみた山形県美術展に入選したりして、満足一杯の経験をさせてもらったのである。

それから、遠く故郷を離れて、京都にしばらく住むことになったのだが、折角の機会なので、本格的に先生に就いて日本画を習うこととなり、そして今仙台に戻って再び絵画教室で手ほどきを受けている。これからは本格的な膠絵の修業と
思っているところである。

* * *

さて、この度の日本医家芸術クラブの美術展にも応募したところ、本誌「医家芸術」の表紙絵に採用して頂くことになった。聊かこの作品について経緯を記してみたい。

山形県南部の置賜地方には、「花回廊」と呼ばれる、江戸彼岸桜の古木が町や部落、十か所ほどに点在している。染井吉野より一週ほど遅咲きなので毎年4月の

中旬ころが見ころで、車で古木、大木の歴史の解説を参考にしながら巡り歩きすると、丸二日はかかるかと思われる。

最高の古木は久保の大桜と言われる千一三百年ほどの老木で、何と、下から支える支柱が50本もある。このような老木が見事に美しい花を咲かせること自体が不思議でもあり、自然の力と、この老木を営わって育ててきた昔からの農民たちに頭が下がる思いである。

表紙に採用して頂いた「老寿」は若い
てなお、花を咲かせる長寿の古木に敬意を払うべく表題にさせてもらった。この江戸彼岸は、白鷹町南端の長井市に通じる街道から、ちよつと外れた丘陵の傾斜地に目立たぬようにひっそり立っている。白鷹という土地の名前の縁起は、米沢藩の上杉鷹山がこの地方に養蚕の技術を導入させて産業を起こしたことに由来していると言われている。

白い繭と鷹山公のイメージがぴったり
の土地柄である。そして毎年のように白

鷹を訪れた鷹山がこの桜を愛でて、楽しんでたという言い伝えが残されている。

お殿様がこの町にこられた南の入り口にちなんで、いつしか、「殿入りざくら」と呼ばれるようになった。樹齢四百年とされるこの老木は、その頃は既に二百歳の樹齢という貴祿を示していた筈だが、それでも今から思えば、この桜ほどのくらい若わかしい美人であったかかと、その歴史を連想するのも楽しいことである。

世親菩薩立像を描く

青 山 六 弥

七年前に、上野の芸大美術館で、国宝の無著、世親菩薩像を拝観し、深い感銘を覚えた。特に世親の堂々たる体躯と遠くを見つめる深い精神性を示す風貌に魅かれ、いつか描いて見たいと思っていた。今回、意を決してM20号の油絵に挑戦した。

先ず無著、世親について仏像の事典な

どで調べ、この二人はインド、四、五世紀ごろ実在した高僧で、卓越した法相教學の論著を多く残した兄弟と判った。特に世親（梵名ヴァスバンドウの漢訳）は大乗仏教の歴史上重要な存在で、唯識論（哲学）の著書が多いので有名と知った。一一二二年、運慶が如何にしてこの肖像彫刻を完成したか、世親の伝記を参考にしたのであることは思うが、このポーズはモデルを用いての作品と想像した。寄木造り、彩色、玉眼（水晶を用いている）、像高一九一厘の大作。約八百年を経て損傷が多く、色は褪せ、古色蒼然の彩色は私の技量では無理だったよう。

絵は仏像の事典のカラー写真を参考にし、頭部はほんの少し縦長に描いた（見上げる視線の写真を微修整したつもり）。しかし世親の深い思案の表情はうつしとれなかった。ただ、ほぼ三ヶ月、精魂を込めて描き上げたので、愛おしく思われる。問題は、この作品を鑑賞される方々の目にとつ映るかです。

墨彩画と日本画

飯田 文良

昭和五十五年頃だったでしょうが、友人から日本画の大家近藤乾年先生に紹介され、先生のお宅に通って日本画の指導を受けました。晩年の先生が一番最後の弟子となりましたが、先生の難聴が進んで、お体の具合も悪くなり、一年足らずで止めることになりました。

先生に描いていただいたお手本を大事にしていますが、墨ひと色で書いた竹や魚やえびの美しさ、淡彩できれいに仕上げた百合やさくらんぼの色あい、先生の「画集にある人物の顔や美しい着物の模様など、私の頭の中にしつかり刻みこまれました。

昭和六十二年頃、墨彩画の山本弥作先生が、呉病院の絵のサークルに月一回土曜日の午後に来ることにになり、早速入門しました。

はじめは風景画から入りました。動くものが描きたくなり、河の水の流れや滝を描きました。次は鳥に入りました。動物園に通って鶴のスケッチをしたり、新潟の瓢湖に行って白鳥を観察して三十号の絵を仕上げました。この白鳥の絵は自分で大へん良い出来と思つたので、「医家芸術」の表紙を飾らしていただきました。

次は仏像に興味を持って、東大寺の山門の吽形仁王像や、奈良吉野の如意輪寺の蔵王権現を描きました。しかし仏像はいくら描いても、その元の仏像の芸術性を超えるものは描けないことを知って、この後からは人物の描写に入りました。

平成十六年から百号の絵に挑戦して、越中・風の盆を見に行つて写真をとったり、佐渡へ行って相川首頭の踊りを写真にとつて、絵を仕上げました。また日本舞踊の「連獅子」や「鶯娘」の舞台姿を豪華絢爛たる衣裳とともに美しく仕上げ、皆さんから大へん綺麗だと誉められ

ましたが、山本先生の批評は辛いものでした。近藤先生の日本画が頭の中にしみついていて、どつしても日本画風の顔になり、日本画的の衣裳の模様になってしまつたのです。花を描いても、墨彩画ではまる墨で描いてその上に色をつけ、更に陰影に墨を入れるので、どつしても花びらが厚ぼつたくなつてしまいます。山本先生はいつも、「もつと墨を使いなさい」と言われます。

平成十七年「西黒音内の盆」の絵は、夜でしたので背景を暗くして、人物にも墨を沢山使つて、よつやく山梨墨画院展で賞をもらつことができました。今までは先生の意見など余り聞かず、自分の思つように描いていましたが、この頃から先生の意見を聞いて描くようになりました。

今年のはわが家の門……代々医業を業としていたのでこの門を「薬医門」と言つただぞつです……の前で孫娘が羽根をついているところを描きました。人物がどつ

しても日本画風になつてしまつたのですが、よく先生の意見をとり入れたので墨画院展で賞をいただくことができました。「日本自由画壇展」にも毎年作品を出していますが、私のように日本画に近い人物の作品もあるので、当分の間人物画は墨彩画と日本画の折衷のよつな形となるでしょう。

不幸が育てた夢

天瀬 裕 康

童画風の幻想的な絵を残したアンリ・ルソー（一八四四—一九一〇）は、フランス西部のラヴァルで生れた。

歌や絵の得意な子どもだったが、父親の仕事が失敗したので、十六歳のとき学校を止めることになる。

十九歳で軍隊に入ったが、二十五歳でやめ、パリに出てクレマンズと結婚。二十七歳から四十九歳まで、ドワニエ（税関吏）として働いた。

二十四時間勤務だが、次の日は休めるので絵が描ける。四十一歳のとき展覧会に出品したものの、幼稚だと笑われる。それでもアンデパンダン展には出品したが、悲しい出来事が続く。

七人の子どもうちの五人と愛妻クレマンズが死に、五十五歳のとき再婚したジョゼフィーヌも亡くなつた。保釈になつたものの、詐欺事件も起こす。

悲しみを忘れるため、夢中で森の動物や南国の花を描くと、やつと認められたが、「異国風景」や「女蛇使い」を発表したのは、もつと六十歳を超えたときだった。「夢」は集大成のよつな作品だ。

死の前年に描かれた「詩人に靈感を与えるミューズ」のモデルは、アポリネールとマリー・ローランサンだが、この年六十五歳のルソーは、五十四歳の未亡人レオニーに恋をする。

彼女は結婚を承諾せず、彼は翌一九一〇年九月二日、足の壊疽がもとでパリの慈善病院で死んだ。

アポリネールはルソーの墓碑銘に、「やさしいルソーよ 聞こえますか……」と書いたが、生涯続いた不幸が魂を揺さぶる絵を生んだのではあるまいか。

批評家たちによると、ルソーの描く密林は夢のイメージだった。自然ではなく造られた世界であり、醒めた夢想家だとも評されている。

ルソーの絵 ことに一九〇五年以後のジャングルの絵には、素朴さとともに怖さがある。それ以前の、子どもや婦人を描いた絵にも奇怪なムードが漂っているが、それはグリム童話の怖さに似たものかもしれない。

ルソーは、素朴派芸術（ナイーブ・アート）の中でも一際輝いている。

素朴派がフランスで生れたのは産業革命の頃だが、世界の工业化が進み過ぎようとしている現在、ルソーの夢は殊更に目を惹くのである。

にわか画伯のスケッチ紀行

関空飛んでイスタン

ブル十三時間

隅 坂 修 身

トルコと日本の時差は6時間、直行関空昼発で、その日の夕方にはかの地に立つて、国際携帯電話も日本国内の番号と同じで、操作が簡単なのが驚きだ。数千軒の店の集まるバザールの賑わい、物乞いを見掛けないことは、非常に貧しい人が少ないのだ。物価は安い、ガソリンが200円台と聞いて驚いた。

世界史で耳にしたトロイ、シユリーマンなどの舞台はこの国で、民族攻防の遺跡もたくさんある。カッパドキアの巨大な地下都市も、人間は追い詰められると、照明の電気も無い時代に、こんな物まで造ってしまつたのかと感心した。地上に造るよりも、地下を掘る方が技術的にも、隠れ家としても得策だがその労力た

るや……。

カッパドキアのホテルで、自称プロの画家が、にわか画伯の絵を見せると言う。見せて、どうかと尋ねると、ささと返ってきた。

「大層、いいの、大」抜けたから、「まあまあ」と言つところか。そして、お前の顔を描いてやるかと我が輩のスケッチブックを取り、ボールペンで描いてくれた。吹っ掛けるどころか、お礼の一杯も辞退するプロに敬意を表し、差し出した「ポケモン」の切手を見て、娘もこれをよく知っていて喜ぶと、「こ機嫌で受け取った」ところで、スケッチブックを開いて見ると、そこには、公開したくない我が輩の「かお」と言つより「がお」があった。半年前の帰国時、関空でフランス語なまりの「オバア」と声を掛けられたことを思い出したが、今度は「オジイ」と言われたよつで、また、描かれている時は、まだ終わらないの？、「早いがこつとあ（御馳走）」、早描きも特技の内よと、今

迄に、我が輩のモデルになった人達の気持を推察した。

ところで、以前紹介した時差ほけ予防をこの度も実行して、ホテルのバーの閉店まで粘った。閉店後は照明も明るくし、バーテンは腕をまくり自慢の入れ墨、カタカナの名前と、寧ろ漢字が現れたり、全員顔を描いてくれと大騒ぎ。バーの支払いは、「ノープロブレム」。好い事ばかりと思つたら大間違い。「諸刃の剣」良く効く薬は、しばしば副作用も強い。痛みが一発で止まったと言んでも、同時に心臓も止まったのでは意味がない。さすれば、効かない薬は安心して使える？

この時差ほけ予防、帰国前夜は一睡もしないうえ、機内の美酒の相乗効果で人生バラ色、この身が無事であればその他は「問題なし」ノープロブレム、閑空も我が家の物置の一つと、大船に乗った気分となるのが副作用であることを認知しよう。ところで、スーツケースは物置の何所に置いた???



アカソフィア宮殿 この背後にトプカブ宮殿 富と権力に目を回す



モデルを務めてくれたお嬢さんと筆者

一枚の絵 「開かれた門」

江川 政昭

門とは、広辞苑によれば、本来家などの外構えに設けた出入り口を指すが、そこから徳に入る門、狭き門など物事の入、経田する所、あるいは門策、同門など師について教えをつけること、その仲間、など様々な意味を持つ。芸術の分野でも古今東西、様々に表現されてきた。私の知る限りでも、彫刻の分野でフィレンツェのサン・ジョバンニ洗礼堂の扉に彫られたロレンツォ・ギベルティの「天国の門」、上野の国立西洋美術館にも納められているロタンの「地獄の門」、そして広島には現代美術館に納められているムーアの「門」など、そして文芸の分野でも夏目漱石の「門」、五木寛之の「青春の門」など。

今回、それらの作品とは比べようもないけれども、「開かれた門」(写真)とい

う作品を描きあげた。これは広島市東区矢賀にある浄土真宗「覚法寺」の本堂と門を描いたものである。この本堂は築300年以上を経ていると言われるが、私もそのお寺の信徒の一人である。

この絵を描ききつかけは、3年前になるだろうが、覚法寺のご任職から、2、3年後にはご子息の若院さんに任職を引



き継ぎたいというご意向をお聞きしてからである。そしてその記念事業として本堂の修復工事をしたいとのことであった。以前より、お寺の為に何か自分にできることはないかと考えていたが、この機会にこの覚法寺を描くことを思っていた。そして許されればお寺に納めていただければと考えた。

それから何度も描き直しなどを経て、完成までに2年かかった。最初に描いた絵は本堂と門のみであった。しかし、本堂と門だけでは自分の絵の技量不足が、想いが伝わらない気がした。この本堂の裏にはこのお寺の門徒の人たちの縁故者や先祖が眠る墓地がある。もちろん私の両親も眠る墓もある。この本堂と門を描くことは、両親をはじめ先祖が眠る浄土を描くよつな気持ちもあった。そこで、この門をくぐって本堂やお墓にお参りする人を描き加えることにした。

この絵の中のお参りする3人は私とは顔、形は違っけれども、気持ちは自分自

身を表しているよつなものである。仏様からお浄土への門はいつも開かれているぞという声が聞こえてくるよつである。月日のたつのは早い。やがては私自身もこの門をくぐりお浄土に導かれていく。

今は、本堂やお墓をお参りする度に、門の前で一礼して門をくぐり、そしてまた、門の前で本堂や墓地を振り返り一礼をして帰っていく。生きていく喜びをかみしめ感謝しながら一日一日を大切に生きていきたい。

平成20年3月、春彼岸の日、この絵は覚法寺の門徒会館に納められ、門信徒の皆さんに披露された。 合掌

私と絵画 白 矢 勝 一

医家美術展の先輩たち

私が美術展に初めて参加させていただいたとき、大村光先生や小金沢滋先生、玉井良男先生にとても大切にしていたたきました。大村先生や小金沢先生ととも

に美術委員の一員として迎えられることになり、何度も当時の渋谷の事務所で開催会前には打ち合わせを行いました。大村先生は足が悪いのにもかかわらず、美術展の開かれているつちは、日本医家芸術クラブの守り神のように会場に座られ心を配っておられました。

懇親会がすむと搬出が始まります。事務局のメンバーやアルバイトの方たちの作業が終わるまで、大村先生はずっと見守っておられ、本当に心からこの会が好きなのだと感じました。サイタ亭先生が亡くなられた時、大村先生が「ああサイタ亭先生」という追悼文を機関誌に書かれています。サイタ亭先生は懇親会場でそれぞれ委員の絵についてご批評されそれも楽しみであつたそうです。

大村先生や玉井先生が亡くなられたことは会にとつて大きな打撃でありました。日野原先生が勲章をいただいたとき、医家芸術クラブでお祝いの会を開きました。そのときの大村先生の大きな声で熱唱さ

れた姿を思い出します。玉井先生は美術部委員を私にやってくれないかと会場で熱心に誘われたこと、絵を見てまわるのにご自分の絵についてこれはどこそこで描いたと説明した後、全ての委員の絵を私と一緒に見てまわられました。知り合いいも多く先生を慕っていた方も多かったですと思います。今年こうして全国の会員から絵が送られて立派に美術展が行われました。大村先生、玉井先生も喜ばれていることと思います。

私の絵画修行

小学校の頃デッサンを習ったせいか絵が好きになり、地方の新聞に絵が出たりして画家になろうと考えていました。ところが画家では飯が食えぬと考え直し今に至っています。大学の頃、油絵を始め美術展が近くなると徹夜で絵を描いたものです。医師になつてからは絵を描く暇も場所もなく絵のことは忘れていました。しかし開業して金はなくとも絵を描く場

所はできましたので、暇を見つけては絵に取り組むようになりました。

ゴッホ、プラマンク、佐伯祐三などが好きで彼らの絵を見るための旅行をしています。

佐伯祐三の生涯を調べ彼が描いた場所に立つたためパリには何度も行きました。パリ、モラン、オーヴェル、アルルクラメール、マントラジュリ、ポントワース、エブラール精神病院

佐伯のマネをして厳寒のパリで絵を描いていると(次頁に写真)観光客が写真を撮らせてくれと何人も来ました。はじめは緊張しましたが、すぐになれました。佐伯の家の外に出てしまえば描けるといふのも理解できました。パリは寒い、モランはもつと寒かつたでしょう。山口長男があれば荒修業だつたと書いています。大橋了介もこれが原因で結核で死ぬことになりました。

佐伯祐三がこのモランで自分の絵がま

だまだ甘いといったことを、どうしてな
んだらうと友人と研究しています。佐伯
の死因や彼を取り巻く人々の後年書かれ
た文章の矛盾などを調べ、佐伯の真実を
求めています。

ゴッホについても彼の訪れた場所に行
つてきました。パリ、オーヴェル、アル
ル、サンレミの精神病院、そしてこのた
び彼の生まれたズンデルトに行つてきま
した。アムステルダムから2時間列車で
ブレダそこから30分バス。ゴッホが10



歳まで住ん
でいた家は
今レストラ
ンになって
いますが、
お父さんが
神父をして
いた教会は
歩いてすぐ
のところだ

す。

アムステルダムでゴッホ美術館に息子
を連れて行ったら、俺も絵を描こうかな
どと言ってくれうれしくなりました。

フランスは精神病を昔からよく研究し
ています。精神病院の敷地は広く美しい。
私の訪れた二つの精神病院もそうでした。
フランス精神病史の一端が下記に示され
ています。

「1785年そのピネルがフランス、サ
ルペトリエールの管理者になり興奮する
患者が拘束されていた鎖を廃止、興奮し
て暴れる患者には拘束衣という体を傷つ
けない方法で鎮静化を図った。また病院
として治療を行い温浴療法等で症状を鎮
めることを模索し始めた。

1801年にピネルが記した本には
「希望のないように見える人達の社会復
帰の希望が見えてきた。病状により隔離
が必要な場合もあるが、理性の能力を発
展させる指導が必要な場合もある」と社

会復帰への情熱を示していた。この教科
書により、ピネルは近代精神医学の祖と
言われている。

ピネルの弟子エスキロールが「外の世
界から隔離された施設の中にいる事は有
益な効果を生じ、家族や友人から離れて
いる事が患者の生活を支配していた以前
の不健康な感情から患者を解放すること
に大きく寄与する」と感じていた。その
後施設(当時はアサイラムと呼ばれてい
た)は欧州中に広まり治療的アサイラム
の組織化がなされた」

私の絵に対する思いは医学と同じで、
追求してもしきれないが、自分にしか描
けない絵を描くことすることが大切とい
うことです。白と黒は色彩を生かす重要
な色でこれがあつて始めて色彩は映える。
マチエール、構図はもちろん大切。色面
と線の魅力これがなかなかできない。こ
れから自分なりの絵を描くため修行を続
けるつもりです。